

はじめに

東京に生まれ、小学生時代、手塚治虫の漫画「鉄腕アトム」を見て育った純ちゃん。昭和三十九年の東京オリンピックの甲州街道を走るマラソンに興奮し、自ら走っていました。裸足で走るアベベに驚き、そして、円谷を応援しました。

その頃から始めた伝書鳩の飼育は、中学生まで続き、大人たちと、鳩レースを競いました。

病気になった鳩に時々、子供獣医さんにもなりました。鳩の飼い方は、本から独学し、レースの仕方は近所の鳩飼のお兄さんたちから教わりました。

朝夕の放鳩。餌やり、小屋の掃除。日曜には、籠に入れて、自転車で多摩川まで走り、

帰巢訓練。ついでに、川遊びし、泳いだり、亀や魚とりをして遊んでいました。

学校の勉強をしないで、趣味に夢中になった少年は、ある時、勉強に目覚め、カトリック系の高専の電気工学科へ進学。

今度は、数学や物理学を夢中で独学。日本最初のノーベル物理学賞となった湯川秀樹の中間子論の本を神田神保町の本屋で見つけ、読みました。ガモフ全集を読み、物質とは何か、宇宙とは何か、天地創造の神さまをも、四六時中考える高専時代。

そんな青年が、物理学者になって世界を巡りました。北海道公立医科大学の物理学教授になってからの出来事が、本書二十五編のエッセイです。

十六世紀に生まれたガリレオ・ガリレイは古典物理学を作る初期の学者です。地球を中心とする中世のキリスト教世界観に反し、地動説を唱え、宗教裁判にかけられました。

「それでも地球は廻る」

当時、魔女狩りなどと言って、多くの無実の人々が、火あぶりの処刑となっています。

二十一世紀の日本にも、福島の放射線について、科学を排除して、迷信が吹き荒れま

した。無理な搬送で亡くなった医療弱者、自殺する人たち、殺処分された多数の家畜たち。故郷を奪われた人たち。

事業仕分けにおける「スパコンの性能は二位じゃだめなんですか？」と言って、スーパーコンピュータ開発の見直しや、「いつ起こるかわからない大洪水の対策に大規模な堤防を造るのは無駄ではないか」と言って、見直された公共事業費の仕分けを、当時の民主党政権はしていました。

その政権下で、反科学のヒステリーとなって、ある人たちは、第一線の科学者たちに罵声を浴びせたのです。

二十一世紀の日本で、「ガリレオ裁判」が繰り返されました。科学立国として情けないことです。

一方、一九九二年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、ガリレオ裁判が誤りであったことを認め、ガリレオに謝罪しました。ガリレオの死去から実に三十五年後のことです。

茶道コンサルタントで、勤皇の系譜となる書を収集し、生涯のご研究とされた白石念

舟先生とは、シルクロードの科学支援で一緒に取り組みました。福島の人道科学支援では、「純ちゃんの話聞いたら」ではじまる応援歌「心配ないよ、福島は」の詩を作成してくださいました。本書の副題は、そうした経緯があります。

本書のエッセイは、北朝鮮の核武装、テロ対策、中央アジアでのチャイナの蛮行、福島の放射線にかかわる核防護論から、北海道の自然、温泉、遺跡を巡りながら調査した日本文明論にまで及んでいます。

本州の人たちにとって、北海道は観光や移住を引き付ける魅惑の島。光は北へと新幹線も延伸されています。太古の北海道について意外な事実を突きとめた「誇りある日本文明」につながる物理学者の休日が、皆さまの参考になれば幸いです。